

青木繁との旅 (2)

小山 多由美

私の伯母(母の姉)は佐賀県唐津市に住んでいる。昨年秋のことである。その伯母に会わなければならないことがあって、私は福岡市郊外から伯母の家を訪ねた。そこで、私は思いがけず青木繁(一八八二〜一九一〇)の作品を所蔵する河村美術館に出合う。全くの偶然である。

岩瀬浩館長のお話を伺って、青木繁が晩年肺結核で亡くなる前に静養のために唐津を訪れて作品を描いたことがわかった。私は、彼に対して心からの親近感を持った。そして、青木繁の晩年の足跡を辿ってみようと思った。

今まで私は久留米市にある石橋美術館で青木作品を鑑賞してきたが、二八歳でその短い生涯を閉じた彼の人生については、ほとんど知らなかった。この際、彼の一生について詳しく知りたいと思ったので、その手がかりとして以前から気になっていたJ R久留米駅近くの「青木繁旧居保存会」(以後「保存会」と記す)を訪ねた。

た。

後日「保存会」の会長 荒木康博さんにお話を伺う機会があり、年々老朽化が進んだ「旧居」の建物は壊されることが決まっていたことがわかった。しかし、青木を慕っている近所の住民が立ち上がり、行政も一緒になって「保存会」を発足させ(二〇〇〇年)、募金や地元の中・高・生美術部による「海の幸」レプリカ作成と設置、けしけし祭り等でのキャンペーン活動を展開した。幸い地元久留米市の支援を受けることができて旧居の復元が実現し、念願の「旧居」がオープンした(二〇〇三年三月)。

地縁でつながっている保存会のメンバー一四人は、現在も週に一回集まって話し合いを続けている。「旧居」の入館料は無料で、近所に住む主婦のメンバーが常時ボランティアで説明を行っている。

開館して九年目に来館者五万人を超えたが、その後も入館者は増え続けている。「旧居」は観光パンフレットにも掲載され、大型バスが停まる駐車場も完備された。「保存会」の活動は、草の根の市民ボランティア活動としても学ぶことが多い。

「旧居」にいくと、少年時代の青木を身近に感じることができた。帰り際に、「けしけし祭り」(碑前祭)に参加することを坂井さんに勧められたので、年が明けて三月下旬、私は柳川文芸クラブの人たちと一緒に碑前祭に参加す

駅に置いてあった地図を見ながら「莊島」バス停で降りて、「ムーンスター」(旧「月星化成」工場)を目印に歩いていくと、反対側の住宅地に「青木繁旧居」(以後「旧居」と記す)という手書きの小さな看板と矢印が見えた。旧有馬藩の下級武士の居住地であったこの地区は、幸い戦火を免れて古い家も残っている、閑静な住宅街である。

十二月初旬というのに「旧居」の庭は紅葉の葉が真っ赤に紅葉していた。駅から電話して道順を尋ねた時に対応した坂井千佳子さんが、心配そうに私を出迎えて下さった。「旧居」の一階には八畳の座敷と六畳の茶の間、台所、二階に八畳の座敷があり、当時の柱などの建材を生かして建てられた和風建築である。床の間のある部屋に座って、感慨深い思いで室内を見まわした。この部屋で青木は一七歳まで両親と姉妹、二人の弟たちと住んでいた。

「旧居」の和室に石橋美術館で観ていた「海の幸」(一九〇四)「わだつみのいろこの宮」(一九〇七)があるので、不思議に思っただけで坂井さんに尋ねると、それらは複製画だった。美術館の中で大きいと思って観ていた「海の幸」(一九〇四)も、狭い部屋の中で原寸大の複製画を観ると意外に小さく見えた。坂井さんによると、「朝日」(一九一〇)の複製画は、小城高校同窓会(黄城会)が佐賀県立美術館に寄託している作品で、実際に鑑賞する機会にはほとんどないため、来館者に特に人気があるということだった。

ることにした。

久留米市の郊外にある高良山(三二二メートル)よりさらに奥の兜山(三二七メートル)にある碑の前で実施される「けしけし祭り」はテレビで見ただけだったが、参加するのは初めてだった。

「けしけし祭り」の日は好天に恵まれ、私たちは西鉄久留米駅から歩いて一〇分ほどの日吉神社に着いた。神社の隣にある順光寺には青木繁が亡くなって一年後に親友・坂本繁二郎(一一八二〜一九六九)らによって建てられた青木のお墓があるので、私たちも墓前に手を合わせた。「青木繁墓」と力強く揮毫された墓は、青木の意志の強さを伝えていたような気がした。

参加費一五〇〇円を払って弁当券をもらった参加者は準備された大型バスに乗り、兜山(福岡県三井郡山本村・現久留米市)を目指した。

高良大社の側を通り、バスはさらに高度をあげながら「久留米森林つじ公園」(奥ノ院)の横を通る。「神護石」と呼ばれる見事に並んだ防塁のための石と新緑の緑が目まぶしかった。

バスは約三〇分近く「耳納スカイライン」を走り、キャンプ場の近くで降りて約一〇分歩くと、青木繁の碑に着いた。

繁は療養先の福岡松浦病院(福岡市東中洲)から、姉の

ツルヨと妹タヨに宛てた遺書の中で、「自分の骨を筑後平野がよく見えるケシケシ山(兜山)に埋葬してほしい」と書いた。実際、碑が建てられた場所からは筑後平野と筑後川が一望できた。参加者もその眺望の雄大さに魅かれ、カメラに収める人が少なくなかった。青木が実際に足を運んで、この景色が気に入っていたのだろう。

久留米高等小学校時代の同級生でもあり、生涯を通じて友情を持ち続けた坂本は、一九四八(昭和二三)年三月二五日、地元の協力を得て除幕式を行った。青木が亡くなつて三七年の年月が経ち、坂本は六六歳になっていた。

碑の表側に「青木繁の碑」とあり、裏側に青木繁の有名な望郷の短歌が坂本の直筆のひらがなで刻まれている。

わがくには

つくしのくにや

しらひわけ

はゝいますくに

はじおほきくに

(わが国は筑紫の国や白日別)

母います国 櫛多き国)

(注) 白日別||「筑紫」(筑紫・筑後地方)を意味する

ひと肌に温められた「かつぽ酒」と弁当をつまみながら文学談義に話が尽きなかった。

四月に入り、水彩画でスケッチを描く「ぐるーぷ・街」(一九九〇年発足)の事務局である私は、下見と会報原稿のために五月のスケッチ例会場所である能古島に船で渡った。島を散策してみると、能古島出身の画家・多々羅義雄(一八九四〜一九六八)について調べることが目的だった。多々羅の絵は昨年春、能古博物館隣にある別館で鑑賞して、その豪快で繊細なタッチが印象に残っていた。

姪浜の渡船場から一五分で船は能古島に着き、しばらく渡船場付近を散策した。対岸には福岡タワーやドーム、マリノアシティの観覧車が見え、博多湾の対岸というのに遠くへ来たような気分になった。船溜まりには近郊で漁をする漁船が係留されていて、のどかな漁村風景も残っている。渡船場近くには小さな市場があり、能古島特産のミカンや新鮮な野菜を売っていた。私は惣菜屋に立ち寄り、かしわめしを買って、能古博物館を目指した。

能古博物館には予め電話で予約していた職員鈴木サカエさんが迎えてくれた。

多々羅義雄は福岡県早良郡残島(現・福岡市西区能古島)で生まれた。彼は一六歳の時に佐賀県小城市小城(現・佐賀県小城市小城町)の旧制小城中で美術の教師をし

第六十一回「けしけし祭り」は、透き通る声楽とヴァイオリンの優しい音色で始まった。献酒には久留米市を代表する関係者が碑の前に出て「かつぽ酒」(竹の筒に日本酒を注ぎ、火で温めたもの)を捧げた。「かつぽ酒」は青木も好きだったという。親族として高山喜一郎氏、青木耕生氏が参加されていたので、嬉しかった。

献奏(マスネ作曲「タイスの瞑想曲」)がヴァイオリンで演奏された後、地元山本小学校三年生による青木繁研究発表が行われた。

やや緊張した声で彼らは郷土の画家・青木繁について「旧居」で学んだ成果を発表した。続いて青木作品の中でも人気が高い「朝日」(一九一〇)をイメージ化して仕上げた貼り絵の作品が紹介された。子どもたちの貼り絵の朝日は大きく太陽が描かれていて、それだけ彼らの心に海に昇る太陽の印象が強かったことに私は深い感動を覚えた。

青木繁の実子で、尺八奏者でもある作曲家の福田蘭堂が作曲した「母います国」を小学生が合唱して碑に捧げた。

最後に袴を身に着けた若い女性によって、前述の青木の短歌が献吟された。

式典終了後、キャンプ場に場所を移して、地元・山本の方々が準備して下さった「かつぽ酒」が参加者にも振舞われた。

私は初対面の柳川文芸クラブの人たちと車座になった。

ていた平島信(一八七九〜一九五五)を慕い、内弟子として彼の下宿に寄寓していた。その頃、平島の下宿を訪ねた青木は、離れの二階で多々羅少年と過ごしたことがあった。青木は当時二七歳だったが、一〇歳以上年下の多々羅少年を、青木の末弟・義雄と同じ名前だったこともあってかわいがっていた。青木は多々羅と一緒に祇園川でハヤを釣り、古湯温泉(佐賀県佐賀郡富士見町・現佐賀県佐賀市富士見町)まで行ったこともあるという(西日本新聞、昭和三八年十二月五日・六日)。多々羅は一九一〇年秋に上京し、満谷国四朗宅に寄寓し、その後、太平洋画会で活躍した。彼の絵は能古博物館に一〇〇点以上寄贈されている。貴重な郷土画家である。

鈴木さんのお話によると、三年ほど前に小城市小城町在住の東島毅氏という方が論考「青木繁と小城・その周辺(1)」「(2)」(古賀次郎「新郷土」422〜425号、昭和五九年五月〜八月)のコピーを能古博物館に持参して、名刺を置いて帰られたという。彼女は多々羅の関係資料をコピーして下さって、小城の東島さんに連絡を取ることを勧められた。

私は青木繁と多々羅義雄が一期共に過ごした小城に行つて、晩年の青木の生活を確かめてみたいと思つた。また、青木繁と平島信、多々羅義雄等の名前が出てきたので、

「佐賀を放浪した」と言われている青木の生活が少しずつ具体的にわかるかもしれないと思った。

頂いた資料を持って帰宅した私は、小城町に住んでいる東島氏に連絡を取った。彼は三年前に能古博物館を訪ねた直後、右頭葉出血で倒れて救急車で佐賀大学医学部に搬送された。しかし、迅速で適切な処置が功を奏し、約五カ月の入院生活を経て現在は健康者と変わらない生活を送っている、と手短にお話して下さった。

私が青木繁の晩年の足跡を訪ねていくことを告げると、嬉しそうに「それなら是非小城に来て下さい」と言われた。麦の穂が色付いて収穫の時期を迎える頃、私は小城を訪ねた。JR鳥栖駅から佐賀駅まで行き、佐賀駅で二両編成の唐津線の黄色い列車に乗り替えた。

ビルやマンションが並ぶ佐賀駅を出ると、左右の車窓の風景は、田んぼに水を引くクレークと麦畑が広がる景色へと変わった。列車は少しずつ高度をあげて走り続けた。天光山脈が視界に入ると、我が家がある三郡山系（福岡県糟屋郡・飯塚市）と似た山間部の風景が広がっている。

約二時間余りで小城駅に着いて列車を降りると、瓦屋根のレトロな駅舎だったので気持ち安らいだ。後でこの駅舎は一九〇三（明治三六）年に開通した唐津線に合わせて開業したことがわかった。映画「男はつらいよ」のロケに

も使われている。

駅の改札を通ると、東島氏が迎えて下さった。電話で脳内出血だったことを伺った時は心配していたが、お元氣そうなお姿だったので安心した。彼は一九四五（昭和二〇）年生まれの六九歳。長年剣道で鍛えられて姿勢が良い方である。三年前に倒れた時は左半身麻痺だったものの、現在は左腕と左手に麻痺が残るまでに回復された。彼の新しい名刺には「小城観光ボランティアガイドの会」と印刷されている。ほたるの季節は大勢の観光客が来るのでお忙しいようだった。

四か月前から運転もできるようになられたので、東島氏の運転で青木繁の縁の地を訪ねた。

彼のご自宅は小城町の中心部から北に位置し、祇園川と交差する温泉橋付近である。青木繁と縁があるご自宅のことだったので、私の期待も膨らんでいた。

車を下りて祇園川沿いを歩いてみると、青木繁の歌碑が目にとまった。

小流こながれに鉤かぎを流して手を束ね

肥前の国は小城に釣りする

青木繁の短歌、「朝日」（一九一〇）のレプリカ、「青木繁と小城」と題する短い解説文が一つの碑の中に刻まれ

ていた。

祇園川は度重なる氾濫のために治水工事が行われて、現在は川幅が小さくなり、水量は減っている。しかし、私の目には対岸から見える透明な祇園川の清流に泳ぐハヤの背びれがきらきらと見えた。ハヤ釣りが得意だった青木にとって、小城で過ごした日々は、心安らぐ時間だったことを私も追体験できたような気がした。

東島氏の説明によつて、北側の前方に「清水観音」と「清水の滝」で有名な清水寺があり、そこから右手後方に青木と多々羅が行った古湯温泉があることがわかった。彼の説明を伺っていると、はるか峠を越えて山道を歩いた二人の姿が私には見えるような気がした。

温泉橋の四つ角付近の横町（現・小城市小城町松尾横町）は、治水工事と道路拡張工事のために残念ながら当時の面影は残っていない。そこで、東島氏は約百年前に撮らした写真を見せて下さった。

この写真は正時代に祇園川の方向から撮影されたものだ。藁葺わらぶきではない瓦葺かぶせの平屋は当時としては珍しかった。

東島毅氏の父親である石川金作は岩蔵いわくら（現・小城市小城町岩蔵）出身で、幼少時に横町の東島家に養子に入った。写真の東島宅は明治時代に建てられた家で、左側の建物が母屋、母屋と並んで右側の建物・別棟は倉二階の造りだった。別棟の一階は倉庫で、二階に二間の部屋があった。

一九〇八（明治四一）年から小城中学に勤めていた平島信は、この母屋に家族で住んでいた。
一九一〇（明治四三）年、別棟の倉の二階に平島の内弟子として一六歳の多々羅義雄が寝起きしていた頃、平島を頼って訪ねてきた青木繁に二階の空いているもう一つの一間が提供された。

前述の古賀次郎の論考によると、この屋敷は「徳エ門さん屋敷」と呼ばれていて、母屋の奥に隠居部屋の「離れ」があり、そこに東島セツさんが住んでいた。

毅氏は、青木と多々羅が過ごした倉の二階で高校生の頃まで過ごしていた。いよいよ道路拡張のために母屋と二階建ての蔵を壊すことになったとき、彼の高校時代の恩師から「君が住んでいた部屋は青木繁が住んでいたんだから、絵かデッサンが出てくるかもしれない。慎重に探してごらん」と重々言われていたけれど、一枚のデッサンも出てこなかった、



大正時代の東島宅 東島毅氏提供

と残念そうに言われた。

それから私たちは車で永泉寺（現・小城市小城町岩蔵永泉寺）に移動した。この地域は横町よりもさらに山間部に当たり、明治から大正期にはいくつもの水車小屋があった。

この集落にある木造二階建ての深町宅を訪ねた。

前述の多々羅が西日本新聞に寄稿していたように、青木は多々羅少年を連れて、清水観音から約六キロの道を歩いて、峠を越えて古湯温泉まで足を伸ばした。秋深まる古湯までの道のりの途中で渋柿を二人で採った。

古湯温泉では扇屋旅館に泊まった。青木には干し柿を作る女中の姿を描いた作品が残っている。

古湯温泉から小城へ帰ってきた青木は、肺結核の症状が進み、吐血してしまう。その場所が前述の深町宅の二階だった。

深町宅は庄屋で、彼は医者を経験があったので、吐血した青木を介抱し、二階で静養させた。そのお札に彼が半分描きかけた絵も古物商に売却され、一時家主に買い戻されたと言うが、現在どうなったかはわからない。

青木は雄大な天山の山よりも、二こぶラクダのこぶのように見える多久市の方角の「二子山」を好んで描いている。

青木の足跡である「糶屋旅館」「みどり屋旅館」などの跡地について、私は東島氏と確認した。その後、「小城市立中林梧竹記念館」に行き、彼の解説を聞きながら梧竹の

書を楽しんだ。中林梧竹（一八二七～一九一三）は小城出身の書家で、明治の三筆の一人である。小学校から高校時代まで書家・赤木石掃（一九二三～二〇〇四）から書を学んだ私にとって、梧竹直筆の作品が鑑賞できたのは楽しい時間だった。

青木自身も達筆で、残された手紙から彼が書にも明るかったことがわかる。青木も小城で梧竹の碑を見たのかもれない。

こうして久留米から始まって小城まで足を伸ばした旅は、私にとって忘れられない時間となった。美術館で青木作品を鑑賞することも大切であるが、彼の足跡を訪ねることによって、「人間・青木繁」が少しずつ目の前に現われてくることを実感した旅だった。